

# 客家の源泉

山あいに静かにたたずむ巨大な客家住居である土楼群。中国福建省西南部の永定、南靖県では漢民族の支流である客家が独特の文化や伝統を維持する。長い時を経た土楼には創建した当時のファミリーの末裔が今も昔ながらの共同生活を送る。赤い土壁には氏族の歴史と結束、悠久の客家精神が息づく。

特集 | [文・写真] 奥村幸広  
text & photo: Yukibiro Okumura

7年ほど前、シンガポールに  
駐在していた時に、世界客家会  
議」を取材したことがある。世  
界各地から参加した客家は約  
3000人。シンガポールのコ  
ンベンションセンターの大  
ホールが200あまりの大き  
な丸テーブルで埋め尽くされ  
た。同じ客家出身であるシンガ



ポールの李光耀(リー・クアン  
ユー)上級相の長男、李顕龍  
(リー・シェンロン)副首相ら政  
府首脳も宴会に参加、遠来の同  
胞と握手を交わし、写真撮影に  
応じていた。出身地別に分かれ  
たテーブルの真ん中に置かれ  
た国・地域名を記したカード  
は、中国、台湾、香港、米国、英国  
などさまざま。2年に1度、世  
界のどこかでこうした大規模  
な懇親大会を開く客家の結束  
力の強さと独自性にまず驚い  
たものだった。

会議内容も多彩だった。たし  
か言語、文化、伝統などをテー  
マとする分科会が開かれてい  
たと記憶している。ある分科会  
では中国の客家集落の住宅を  
テーマにスライドを駆使しな  
がら報告者が熱弁をふるって

いた。伝統文化を重視する客家  
の一面をのぞいたような気にな  
ったものだ。

客家は漢民族の一支系。客家  
語を使い、黄河流域(中原)に  
ルーツを持つ。4世紀の西晋末  
からの戦乱を逃れて南下を始  
めた。本来の土地の戸籍を失っ  
たさすらいの旅人をさす「客  
戸」という言葉が歴史上に登場  
するのは東晋時代の西暦30  
0年前半という。唐代にこうし  
たさすらい人は正式に「客戸」  
として戸籍に編入された。移住  
者をさす「客家」という言葉は  
相当に古い歴史を持つ。

客家の多くが移り着いた先  
は岩茶やウーロン茶で名高い  
福建省武夷山周辺、それに江西  
省南部、福建省西部だった。唐  
以降の戦乱でさらに客家の南

下は続き、居住地域も広東省北  
東部に広がった。同省の梅州地  
域は客家の地として知られる。  
その梅州以上の客家の集落地  
が福建省西南部の龍岩市永定  
県、漳州市南靖県である。住民  
のほとんどが客家、普段の共通  
語は客家語である。

厦門から車で約5時間。山道  
を走破して永定の客家集落に  
着いた旅行者は目前にそびえ  
る巨大な客家住居である円形  
土楼群に感嘆するはずである。  
地上から生えているような直  
径数十メートル、高さ10メー  
ル以上、周囲200メートルも  
あるうかという円形の土の  
かたまりはまさに外敵を防ぐ砦  
である。外壁内側には木を組み  
合わせた部屋が張り付く。小さ  
な部屋が円筒状の外壁に沿っ

## 故郷を追われた流浪の民が 築きあげた巨大な砦





て3階、4階に積み上がった光景は蜂の巣を連想させる。

1960年代に米国の偵察機が福建省西部の巨大円形土楼を宇宙人の空飛ぶ円盤と誤認したとの逸話も残る。確かに空中高くから見下ろせば、空飛ぶ円盤と見間違えても全く不思議ではない。円形土楼を目の前にすると、この逸話は本当の出来事ではと思わせる迫力がある。

永定、南靖地域には円形、方形の土楼が約2万も残る。古くは唐時代のもも残るが、多くは1700年代から1900年代のものが多い。

「東傾西歪」。南靖地域の円形

土楼「裕昌楼」を訪れたとき、住民の一人がこう説明してくれた。この土楼は1308年から30年間も費やして建てられた。住居部分は五階建てで、各階の回廊の支柱が左にやや傾き、全体に歪んでいるような妙な感覚を受ける。建築時に予想以上に多大な労賃をもらった大工が、建物全体の装飾として柱を傾かせたという言い伝えが残る。「東傾西歪楼」と呼ばれる由縁である。

日本でいえば鎌倉時代末から室町時代初めにかけて建てられたこの「裕昌楼」は高さ20・6メートル、直径は約40メートル。劉、羅、張、唐、范の姓を持つ5家族が共同で築き上げたという。土の外壁の厚みは1・8メートル、約700年の歳月を経た今でも劉家を中心に21家族123人が昔ながらの共同生活を送る。

なぜ、数百年もの昔の土楼が震災などにも耐えて、今も残っているのか。その秘密は土の成分にある。見た目は何の変哲もない赤土だが、実はただの土ではない。米で作ったのり、卵の



## 土楼に育まれる勤勉不屈の客家精神



白身、黒砂糖などを混ぜ合わせ、時間をかけてつき固めた特性の土壁である。触ってみたところ現代の鉄筋コンクリートと変わらない頼もしい感触が返ってきた。

永定県はたばこの葉の主要生産地。1800年代から1900年代にかけてたばこの葉で巨万の財産を形成した客家のファミリー当主が財力を注ぎ入してこうした巨大な土楼を

築いた。

それにしても巨大な土楼を築くには気の遠くなるような労力と時間がかかったことだろう。円形土楼の王様と言われる永定県の「承啓楼」(1712年完成)は直径73メートル、周囲230メートル、高さ12メートル、外壁の厚さは1・5メートルもあり、その威容から「天助楼」とも呼ばれる。400もの部屋があり、最盛期には江氏



一族の80家族約600人が住んだ。土楼の王子と呼ばれる同じ永定の振成楼へ1912年完成も、承啓楼に匹敵する威容と規模を持つ。

客家は多くの人材を輩出した。太平天国の乱を起し清滅亡を早めた洪秀全、辛亥革命を起した孫文、鄧小平、朱徳ら新中国建国の要人、前述の李光耀氏、1800年代末から1900年にかけて東南アジア最大の企業帝国を築き上げた張振勳、薬のタイガーバームで知られる愛国華僑の胡文虎、朱

子学の朱熹、文豪の郭沫若、香港を舞台に「慕情」を書いた韓素音（ハン・スーイン）ら、枚挙に暇が無い。

ちなみに台湾の李登輝前総統、呂秀蓮副総統は永定がルーツである。李登輝氏の祖先を祀った「李氏宗廟」は永定山中の小さな客家集落にあった。

なぜ、客家に名をなす人材が多いのか。土楼にもその一因を見いだすことができる。完成まで数十年もかかる巨大な土楼を築く氏族の団結力と粘り強さ、困難や圧迫に屈し



ない勇氣、それに学問への情熱である。

土楼内部の柱の銘文などには、学問に励めという言葉が多く見いだせるという。南靖県の張氏一族が住む塔下村の丘には高さ10メートルほどの石製の筆22本がそびえ立つ。官吏登用試験「科挙」の合格者が出るたびに巨大な石の筆を立てて、一族こそって榮譽を記念した名残である。客家の氏族集落にはこうした「石筆林」を立てる地域が多い。勉学に励むよつ定めた「祖訓」を持つ氏族も多い。

田畑耕地が少ない山村に逃れた客家が世に出るすべは学問が一番の近道だったからである。近現代でも例えは先に触れた「振成楼」の林氏一族からは多数の博士や大学教授、政治家を輩出している。

香港や台湾の華人に、どの出身ですかと聞くと、胸を張って「客家です」と答える人によく出会う。山里の土楼、それを築いた一族の長い歴史をひもとくと、著名人を輩出した「客家精神」の一端がうかがえるような気がする。